

学びと仕事の繋ぎ

荻谷 剛彦 東京大学 大学院教育学研究科 教授

[講演の概要]

戦後の日本社会には、「学歴社会」と呼ばれる特徴があった。どの段階の学歴を得たかという、「タテの学歴」ととどまらず、同じ学歴段階でもどの学校・大学を出たかという「ヨコの学歴」によって、就職先や就職後の昇進の機会に差異がでる。それゆえ、少しでも高い学歴や、評価の高い学校・大学に入学しようとする「受験競争」が激化する。このような教育と職業との関係のしかたを表す言葉として、「学歴社会」が使われた。

こうした学歴社会を論じる議論は、「学歴社会論」いわれるが、そこには通常、学歴と職業機会との強い結びつきを非難する否定的なニュアンスが込められていた。役に立ちそうもない「知識」を詰め込むだけの教育を誘発する「受験競争」。職業で発揮される能力や実力とは無縁に、肩書きだけで就職や昇進が決まる「学閥」の影響。その無意味さや不当性を非難するニュアンスを学歴社会論は含んでいた。

しかし、現時点から振り返ってみると、こうした学歴社会論が成立するためには、日本社会に特徴的な教育と職業との結びつき方があったとみることができる。それは、「新卒者」を優先的に「正社員」として採用し、長い時間をかけて同期入社した者たちを競争させる日本的な雇用慣行であった。入学試験時の序列によって「会社」が決まる「大学・学校別の採用」、卒業と同時に「新入社員」としての職業生活が始まる「間断のない移動」、さらには(多くの場合男性中心の)「正社員」を長期間のOJTを通じて職業訓練の機会を提供するしくみとを特徴にする、「学びと仕事のつなぎ方」であった。

1990年代を通じて、こうした仕組みに亀裂が入り、「学歴社会」という言葉もだんだんと使われなくなった。この発表では、そのような変化を振り返ることから、現代の「学びと仕事」の関係について考えてみたい。

[プロフィール]

米国ノースウェスタン大学大学院で Ph.D. (社会学) を取得。ノースウェスタン大学政策研究所研究助手、同客員研究員、同大客員講師、前・放送教育開発センター助教授などを経て現職。専門は、教育社会学、比較社会学。主な著書に『階層化日本と教育危機』(有信堂、第1回大佛次郎論壇賞奨励賞受賞)、『教育改革の幻想』(ちくま新書)、『大衆教育社会のゆくえ』(中公新書)、『知的複眼思考法』(講談社)、『教育の世紀』(弘文堂)、『考え合う技術』(共著、ちくま新書) ほか。